The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.25 2021

イシグロの描いた被爆マリア
『不思議なときおりの悲しみ』における被爆者の表象

松田　雅子

Ishiguro's Bombed Mary
Representation of *Hibakusha* in 'A Strange and Sometimes Sadness'

MATSUDA Masako

長崎外大論叢

第25号
（別冊）

長崎外国語大学
2021年12月

イシグロの描いた被爆マリア
『不思議なときおりの悲しみ』における被爆者の表象

松田　雅子

Ishiguro's Bombed Mary
Representation of *Hibakusha* in 'A Strange and Sometimes Sadness'

MATSUDA Masako

Abstract

Kazuo Ishiguro' s first short novel, 'A Strange and Sometimes Sadness' (1980), is a story about Nagasaki and the atomic bomb victims, as is also more well-known *A Pale View of Hills*. This novel tells the story of a young student, Michiko, and her childhood friend, Yasuko. The climax of this work is a scene in which Yasuko, who will be killed by the atomic bomb on the following day, shows intense anguish on her face in the middle of a conversation with Michiko, as if Yasuko were trying to reveal to her friend a sudden premonition about her own destiny. After that, Michiko doesn' t see Yasuko any more. However, she imagines Yasuko' s face, twisted in suffering, as an omen of her unbelievable pain and agony. In this way, Ishiguro tries to express the suffering of *Hibakusha* without depicting the horror of the bombing itself. Yasuko and Michiko might be in the "Shingakko" (a school for studying theology) gardens, near Ishiguro' s birthplace in Shin-Nakagawamachi, where the statue of Mary is looking down. Later, near the hypocenter the A-bombed statue of Mary in Urakami Cathedral was found and became a symbol of the *Hibakusha* in Nagasaki. Like Bombed Mary in the real Cathedral, Yasuko could be considered as representation in literature of the sufferings of A-bombed victims.

キーワード

カズオ・イシグロ、長崎、被爆体験、被爆マリア

1．はじめに

長崎出身でイギリス国籍の作家カズオ・イシグロは2017年、ノーベル文学賞を受賞した。受賞の晩餐会においては、原爆を体験した母親石黒静子さんの平和への切実な願いにふれ、感動的なスピーチを行っている。奇しくも、その年には、核兵器廃絶を掲げたNPO団体の「ICAN」もノーベル平和賞に輝き、両者の同時受賞は長崎市民にとって運命的なものに感じられた。

イシグロが長崎を舞台とした長編小説『遠い山なみの光』を著し、次作の『浮世の画家』でも長崎らしい地方都市が描かれた1980年代には、日系で長崎出身の作家が、たまたま英語で長崎のことを書いているのだと単純に思っていた。しかし、次第にその横顔が明らかになり、イシグロの母である静子さんは、第二次世界大戦末期に市内の軍需工場に学徒動員されていたことがわかってきた。当時、

長崎高等女学校専攻科生であった静子さんは、旭町にある三菱電機の工場で働いていた[1]。原爆投下当日は大きな偶然が働いて、さいわい直接の被害は免れたが、救護活動などを通じて原爆の惨禍を身近で体験されたようだ。

作家としてのイシグロは1980年にこの短編小説『不思議なときおりの悲しみ』によって、デビューを果たす[2]。『バナナズ』というイギリスの文芸雑誌に発表され、のちに、フェイバー社の『イントロダクション７』[3] という新人作家による短編小説集に掲載されたこの作品は、若い女学生ミチコと原爆で亡くなった友人のヤスコについての物語である。イシグロが長崎のことを書くようになって、両親が原爆について詳しく語ってくれた時のことを、彼は2000年のインタビューで次のように回想している[4]。

> 『私は母がこう言ったのを覚えている、「あなたは今、公の立場に立ち、少しだけど、影響力を持つようになった。私には私と一緒に葬り去ってはいけない思い出が、いくつかあるのよ」と』そのとき母静子さんがイシグロに語った物語の大部分は、（原爆で）亡くなった友だちの個人的なエピソードだった。10代の少女との思い出である。……1945年８月９日、その少女は18才であった。

イシグロは、キャリアの最初の頃には、自分は長崎を描くことで、批評家の好意的な評価を得ることができたと告白しているが[5]、長崎を舞台にした作品はこの短編と『遠い山なみの光』の二作だけである[6]。それ以来、彼は「長崎、原爆、日本」から離れ、イギリスや世界を舞台にした作品へと移っていく。そして、小説家としての道を着々と歩み、大成したイシグロは、2017年ノーベル文学賞受賞という栄誉に浴した。選考委員会はその受賞理由を「強く感情に訴えかける数々の小説により、世界と結びついているという我々の幻想の下にある深淵を描き出して見せた」[7] としている。

この短編小説は彼の最初の作品であるにもかかわらず、まさに、そのような特徴を示しているといえるだろう。恋人をめぐる友だち同士のライバル意識や、娘の結婚問題をめぐる娘と父との葛藤を描き、読者の感情に強く訴えかけるとともに、戦時中の人々の生に潜んでいた、原爆投下という深淵を描いたからだ。

イシグロが母親の願いに応えて「長崎、原爆」を描いたこの短編小説を、人間関係がどう描かれているか、被爆体験の表現法、舞台となった長崎という観点からアプローチしてみたい。

２．人間関係の描写

イシグロはノーベル賞の授賞式で恒例の受賞記念講演を行なった。「特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレークスルー」[8]というタイトルの講演では、どのようないきさつで作家になったのか、どのようなテーマを展開し、どのような技法を使ってきたのか、その創作の秘密を明らかにしている。

タイトルにある「特急二十世紀」というのは、ニューヨークとシカゴを結んでいた有名な豪華列車である。あるときイシグロはその列車を舞台にしたジョン・バリモア主演の映画を見ていた。その時彼は、バリモアの卓越した名演技にも関わらず、妙に物語が心に届いて来ないという経験をしたので、物語の展開にはいったい何が重要なのかを深く考えるようになったという。

イシグロがたどり着いた結論は、人物だけではなく、人物間の人間関係を納得できるように描くべ

きだ。リアルな人間関係の創造がラウンドな人物造形の秘訣ではないかというものであった。E・M・フォスターは、人物が「意外な動きをし、その意外さに読者が納得できれば」、その人物は「丸く（立体的に）」なり説得力がでてくると言っているが、イシグロはそれに加えて「いくら登場人物が立体的であっても、その人物と他者との関係が全く立体的でなかったらどうなるだろう」と感じ、「これからはもっと関係に注意しよう。そうすれば、たぶん、登場人物が勝手に立体的になっていってくれるのではないか」と発見したという。

それを踏まえて、この短編を読んでみると、彼が2001年に映画を見て実感した、物語における人物間の人間関係を丁寧に描くという技法がこの作品ですでに試みられていることに気がつく。登場人物は少ないけれども、人物間の関係性が丹念に描かれ、説得力があるからだ。

この作品の主な登場人物は、ミチコ、友人のヤスコ、キノシタさんである。次に重要な人物は、ナカムラさんとミチコの娘のヤスコである。ミチコとヤスコの関係は、幼なじみでクラスメートであり、しかも恋の競争相手でもあった。「工場での長い一日の後、私たちはお互いの交流に安らぎを見出していました」(7)[9]という間柄で、Shingokkoの庭園で長いこと語り合っていた。時には喧嘩になることもあり、わだかまりがなかなか溶けないこともあった。

それに加えて、ミチコはヤスコの父、キノシタさんをとても慕っていた。彼の性格については次にように描写されている。

> 彼女のお父さんには、子どもの頃からずっと好感を持っていました。おじさんのまなざしには、いつも優しさがあふれ、娘さんと同様に、親切で物腰の柔らかい人でした。とても穏やかなキノシタのおじさんの存在は周りの人たちを元気づけてくれ、私はおじさんと一緒にいると、いつも嬉しく思いました。(3)

工場へ勤労奉仕に通うミチコはキノシタさんと通勤電車で一緒になり、彼はミチコがかつてはナカムラさんのことが好きだったのではないかと、かなり立ち入った質問を口にし、ミチコをおどろかせる。普段から、キノシタ家にたびたび立ち寄っていたミチコは、ある日キノシタさんから食事に招かれ、彼の手料理をごちそうになる。彼は娘が結婚した後の一人暮らしに備えて、料理をマスターしようとしていた。しかし、彼の努力にもかかわらず、その時に出してくれた料理は、あまりに塩が効きすぎていて到底食べられたものではなかった。

キノシタ家の家族は、７年前1938年ごろに母親ががんで亡くなり、長男は1941年ごろに戦死し、父と娘の二人だけが残されていた。ヤスコは、古い日本の儒教的な道徳から、親の面倒を見なければならないという義務感を強く感じていた。そのために、ナカムラさんとの結婚までもあきらめなくてはいけないのではないかと思って、深刻に悩んでいた。ミチコは「そんな風に自分自身を犠牲にするなんて、そんな馬鹿げたことが出来るの？」(10) とヤスコにアドバイスしている。

ヤスコは父に対する親孝行と、自分の結婚問題の板ばさみになり、父とけんかをしてしまい、時には怒ってガラス鉢を投げつけることさえあった。一方、父親の方も何とかこの事態を改善しなくてはならないと考え、料理の修行をしているが、思うようにはならない。家事は女性の領分という男女分業の体制が自分の自立を妨げていると、無力感を感じている。このように、主要人物三人の関係性が丁寧に描かれ、性格描写に加えて、人物像をラウンドなものにしているといえるだろう。そして、ヤ

スコは悩みぬいた末に、父親の人生とは関係なく、結婚という自分の道を歩いて行こうと決心する。このような日本的な生活様式の場面の描写には、小津安二郎などの日本映画を思わせるものがある。

3．被爆体験の表現

この作品のクライマックスは、明日原爆で死んでしまうヤスコが、そのことをあらかじめ予知しているかのように、ミチコとの会話の最中に、まるで夜叉のような表情を浮かべる場面である。小説はそのクライマックスをめざして進んでいく。超自然的な原爆の予兆の場面の説得性を強めるために、小説の冒頭から、ミチコと生まれたばかりの娘ヤスコのつながりの神秘性が強調される。病院と自宅という離れた場所にいる母娘が、まるで一緒の部屋にいるような行動を取っているからだ。

若くして長崎の原爆で亡くなったヤスコの人生は、やがてイギリスで生まれた次世代のヤスコに受け継がれていく。若いヤスコは、核兵器反対の嘆願書の署名活動をしているが、長崎のことには無頓着である。しかし、彼女は母が長崎出身であることさえ忘れてしまったかのようにふるまっていても、その思いはしっかりと受け継がれているようだ。そして、亡くなったヤスコが夢見ていた、結婚して子どもを育てるという生き方が、若いヤスコが同棲し結婚するという現代的な形で実現していく。

しかし、平和運動をしているにもかかわらず、若いヤスコの被爆地長崎についての個人的な思いは淡々としている。これは若い世代の意識を代表しているのかもしれない。また、これに関しては、イシグロの母方の祖父は放射線の影響で亡くなってしまったが、両親は原爆が残虐だと怒りを表すことはなかったので、不思議に思ったというイシグロの印象が反映されているのかもしれない。

> 私の母の父親は、爆発の近くにいたのではないが、おそらく放射線の影響で、原爆投下から間もなく亡くなってしまった。しかし、母はそのことについて、恨みがましい口調で話したことは全くなかった。概して、日本人は原爆投下について強い憎しみを持っているようには見えない。彼らは平和や核の問題についてはとても情熱を持って語る、しかし、私の印象では、彼らは原爆投下を残虐な行為だと決めつけることはないようだ。これは、不思議なことだ[10]。

原爆の前日の夕方、ヤスコの顔に浮かんだ激しい苦悶の表情について、ミチコは後年こう説明している。「私は頻繁に、彼女のあの顔つきや、あの晩、あの表情を見たときの状況を思い出すのですが、多分あれは、原爆に対する虫の知らせだっただけではなく、ヤスコがあの瞬間に何かを、私自身の顔に何かを見ていたのだと思います」(14)。

ヤスコの苦しみの表情は、原爆で死んでしまった人たちの想像を絶する苦痛と苦悩の表現であると同時に、自分は助かってよかったという安ど感や、また自分だけが生き残っていいのだろうかという罪悪感が混じった表情がミチコの顔に浮かんでいることに対するヤスコの驚きや非難だったのかもしれないとミチコは想像している。被爆者の悲惨な状況とともに、原爆投下を生き延びた人たちも、運命のいたずらに対し、無力感や罪悪感を交えた複雑な感情を抱いて生活せざるをえなかった。そのような状況を、この場面で表そうとしたといえる。

被爆者の被害の状況をつぶさに描くことで核兵器の恐ろしさと非人道性を訴え、それと同時に読者に文学としての感銘を与えるということは、原爆文学の理想だといえるが、それは作家にとって至難の技であるといえるだろう。悲惨な光景からは、できれば目をそらしたいという気持ちも、読者の心

のどこかに潜んでいるうえに、国内であれ、国外であれ、それぞれが原爆投下をめぐって異なる政治的な状況に置かれているからだ。この場面の設定は、そうした難問に対するイシグロの答えの一つであるといえるだろう。

4．神学校の庭で語らう―この世界の片隅で

主人公たちは、長崎の中川という地区に住んでいて、ヤスコは「戦時中、彼女は私の家からそう遠くない、街を見下ろす休火山へと続く曲がりくねった山道の横の一軒家に、父親と一緒に住んでいた」（3）という。中川から登っていく休火山というと、第一には長崎市を一望に見下ろす彦山が思い浮かぶ。休火山が複数形になっているので、彦山あたりの山々を思い描いているのだろう。

ミチコとヤスコが庭園で語り合っている場面での、「薄暗がりに、夏の虫がいたるところに沢山飛んでいました」（6-7）という描写は、蛍の名所であった蛍茶屋のことを思わせる。ここは、中川の電停の次にある市街電車の終点である。

さらに、蛍茶屋や彦山のあたりの主な施設としては、本河内に聖母の騎士高等学校がある。ポーランドから来日したカトリックの修道士コルベ神父は、長崎での教会建設の地として彦山山腹の本河内を選び、1931年聖母の騎士修道院を建設した[11]。コルベ神父はこの地で『聖母の騎士』という雑誌を発行し、聖母マリアへの信仰を中心にした布教活動を行なった。さらに1936年に神学校を設立し、この学校は1968年までは「聖母の騎士小神学校」と呼ばれていた。神学校のある本河内は、中川のすぐ隣の地域である。

神学校には、コルベ神父が1932年に開いた「ルルドの泉」がある。聖母が顕現したという伝説で知られるフランスのルルドを模して、洞窟の入り口にたたずむ聖母マリアと聖母をあがめる少女の像が造られ、彦山からの水があふれる泉を見下ろしている。マリア像の前には小さな広場とベンチがあり、西の彼方には長崎市を遠望し、夕暮れ時には美しい夕日を鑑賞することができる。下の道路からルルドへ登ってくると、マリアとキリストの生涯の出来事を描いたレリーフが飾られた階段状の５つの小さな庭がある。

ミチコとヤスコが散策した「Shingokko の庭」というのは、この小神学校のルルド近くの庭ではないだろうかと思われる。Shingokko gardens（11）（13）やgardens（13）と庭が複数形になっている。さらに11ページには小さな木のベンチに座って、そこから、沈んでいく夕日をながめるという描写が２か所出てくる。このようなことから、西向きで、いくつか庭があり、木のベンチに座って日没を見ることができるのは、中川町付近では、神学校の庭だろうと推測される。小神学校とは、司祭を養成する大神学校に進学する中学・高校生を教育する機関であり、土地の人には神学校Shingakkoという名称で呼ばれていた。幼かったイシグロはShingokko として記憶していたのだろう。しかし、長崎人にとってはShingokkoの庭と聞くと、すぐに「神学校の庭」のことが浮かんでくるのである[12]。

ミチコとヤスコの二人の女学生はShingokkoの庭のベンチに座って、様々なことについて語り合う。おそらく近くにはマリア像も二人を見降ろしていただろう。そのような状況の中で、ヤスコは突然その若々しい顔立ちに苦悶の表情を浮かべ、翌日原爆で亡くなる運命の予兆のような神秘的な出来事が起こる。18才の乙女の花のかんばせを一瞬のうちに奪い去った原爆の惨禍が、このような形で描かれている。ヤスコの苦しい歪んだ表情は、一瞬のことであったが、被爆者全体の苦しい経験を表象するものとなっている。生き残ったミチコは、その後も頻繁にあの夜見た彼女の顔の様子を思い出すとい

う。ヤスコは結婚問題について悩んだ末に、ミチコのアドバイスを入れて、自分がいちばんいいと思う道を行こうとようやく決心する。そのときに、原爆が彼女の悩みも選択も決意も一瞬にして吹き飛ばしてしまう。

2021年長崎外国語大学の春学期の英語文学入門Iでこの作品を取り上げて翻訳を試みたが、学生の一人が次のような読後の感想を寄せてくれた。

> この作品では（原爆が）悩みも何もかも全て奪ったという表現になっていて、悩み苦しむことさえも、生きていることの特権なのかもしれないというふうに考えることもできました

と書いている。まさに、ノーベル賞の授賞理由である「世界と結びついているという我々の幻想の下にある深淵を描き出して見せ」ているのである。

最近、広島の原爆を扱ったアニメーション映画『この世界の片隅に』[13] が2016年に公開され、人々の共感を集めている。一人の男性と彼をめぐる二人の女性の日常の営みが突然、原爆で奪われてしまうという物語の展開であるが、この短編小説は登場人物の人間関係や原爆投下などが似通っており、この映画に先行する長崎版のような印象を与える。

5．文学における被爆マリア

長崎の原爆は、長崎市の北にある「東洋一」[14] とうたわれた浦上天主堂のほぼ真上で爆発した。聖母マリアに捧げられたこの教会は、16世紀に西洋から伝えられたキリスト教の信仰を守る隠れキリシタンの人たちによって建設された天主堂である。しかし、1945年８月９日、聖母被昇天の祝日の準備のために集まっていた二人の神父と信者たち全員が、教会で命を落としてしまった。

西洋文明の柱として、フランスの批評家ポール・ヴァレリーはキリスト教、ギリシア文明、科学の発達の３つをあげている[15]。西洋から長崎に伝えられたキリスト教の信仰を、迫害に耐えて守り抜いてきた隠れキリシタンの発見は「東洋の奇跡」[16] と呼ばれたできごとであった。しかし、西洋の精神的な支柱となってきたその信仰を受け継いだ人々が、同じく西洋文明の先端の科学技術によって作り出された原爆の攻撃を受ける。一瞬にして、命はもとより現世的な幸福も奪われてしまうという長崎の原爆投下は、西洋文明の矛盾が一挙に噴き出したできごとであった。

このような矛盾の構図を如実にあらわす浦上天主堂の遺構は、今日まで残っていれば、世界遺産にも登録されたであろうと惜しまれている[17]。しかし、アメリカ側から遺構撤去の要請があったらしく、1958年、遺構の保存を決めた市議会の決議に反して、市長の意向で取り壊され再建されることになった[18]。

一方で、被爆直後、教会の焼け跡から被爆マリアの像を掘り起こし保存していた野口神父が、その像をカトリック教会へ返還し、マリア像は1990年になって浦上天主堂へと戻ってきた[19]。それ以後、失われた浦上天主堂の遺構に代わって、焼け焦げた被爆マリアの姿は、長崎の被爆のシンボルとなった。

他方で1936年、祖国ポーランドに帰還したコルベ神父は、やがてナチスに捕らえられ、アウシュビッツ強制収容所に送られる。その後、コルベ神父は、1941年餓死刑を宣告された他の囚人の身代わりとなり、ホロコーストの犠牲となった[20]。日本を離れる直前にコルベ神父が創設していった小神学校は、第二次世界大戦が終わると発展の時期を迎える。アメリカから資金援助を受けて、生徒数が一時期は

120名にまで達したという[21]。イシグロが中川で幼年時代を過ごした頃のことである[22]。

ミチコとヤスコが神学校の聖母マリアの庭で語り合ったとすれば、ヤスコの顔に浮かんだ苦悶の表情は、長崎の原爆被害のシンボルとなっている被爆マリアの連想を誘い、その苦しみを思い起こさせる。浦上の被爆マリアが、現実に被爆した人たちの苦しみを象徴する聖像ならば、本河内のマリア像の近くで苦悶の表情を浮かべるヤスコは、文学に描かれた、文学における被爆マリアであるといえるだろう。

6．まとめ

イシグロのノーベル賞受賞のあと、石黒静子さんの妹である森永和子さんは、新聞社のインタビューで「（自分）自身は助かったが、同じ工場に勤めていた親友５人を失くし、姉は毎晩泣き明かしていた。10月に学校が再開し、弔辞で亡くなった親友との思い出を語る姿が今も記憶に残る」と語っている[23]。この作品は、イシグロの初期の短編の中でも特に優れた作品だとされているが、せめてその思い出だけは残しておきたいという、親友を亡くした静子さんの願いが結実している。また、神学校という言葉からは、学校を建設したコルベ神父のアウシュビッツでの殉教へと連想が広がり、イシグロは意図していなかったと思われるが、平和の願いにさらに大きなパースペクティブが加わっている。この作品で浦上と本河内の二人のマリア像と、長崎とドイツの二つのホロコーストが交わっているのだ。

イシグロは先に引用した『ガーディアン』紙の記事で、「私は長崎に生まれたということに深く感謝するようになった　……　その都市を舞台にした小説は私が簡単にグローバルな重要性を獲得することを可能にしてくれ」、そして批評家たちは尊敬の念を持って作品を受け入れてくれたという。しかし、それ以上に、長崎は西洋文明をいち早く取り入れた国際的な都市であり、そこを舞台にするならば、その歴史の光と影が幾重にも交錯し、作品に陰影を与えていることがわかる[24]。

イシグロは『遠い山なみの光』の後は、長崎について、原爆について書くことはなかった。しかし、ノーベル賞受賞に大きな貢献をしたと思われるクローン人間をテーマにした『わたしを離さないで』について彼は、最初は核兵器か冷戦の心理構造について書こうとしたが、うまくいかなかったと話している。主人公たちは何か核兵器のようなものに遭遇し、命を絶たれる運命にあるという構想だったが、それがクローン人間へと代わっていったという[25]。たとえ、主人公がクローン人間に代わったとしても、この作品における、避けがたい過酷な運命を受け入れ、耐え忍ぶ人間像の創作過程で、被爆者の生き方や心理が大きな示唆を与え、イシグロ文学にさらなる深みを与えたことは間違いないだろう。

ミュージシャンを目ざしていたイシグロの耳に残っていたShingokko という、幼い頃に聞いた微かな日本語の響き、その言葉はおそらくShingakkoのことではないかという類推からこの短編小説を読み解いてみた。この作品には、結婚し平和で幸せな家庭生活を夢見ていた若い女学生の命とその青春の夢に連なっていく日常が、原爆によって一瞬にして奪われたいきさつが描かれ、長崎市民にとって極めて重要な作品であるといえる。

注

1　石黒静子さんの長崎高等女学校の後輩牛島美知子さんに、2021年２月16日、電話でインタビューを行なった。静子さんは三菱電機の旭町工場で、牛島さんたちと一緒に働いていた、ということだった。イシグロの発言として、母は地下の工場で働いていたというものがあるが、（平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』2018、長崎文献社、41）牛島さんへのインタビューで、旭町工場で働いていたことが分かった。地下の工場とは、住吉トンネル工場のことだと思われる。叔母の森永さんが、住吉トンネル工場で働いていて、原爆による負傷から免れたということだ。神戸新聞NEXT、2018年２月14日.
http://blog.livedoor.jp/sagittariun/archives/7551641.html 2021年３月５日アクセス。

2　'A Strange and Sometimes Sadness', 'Waiting for J', 'Getting Poisoned' の３作品が掲載された。

3　*Introduction 7: Stories by New Writers,*（Faber & Faber, 1981）.

4　Susie Mackenzie, Between Two Worlds, The Guardian, Mar. 25, 2000.
https://www.theguardian.com/books/2000/mar/25/fiction.bookerprize2000
2021年３月８日アクセス。

5　Kazuo Ishigura, BOMB CULTURE, *The Guardian,* August 8th, 1983, p9.　この記事では、作者名が、Ishigura となっている。

6　長崎における被爆者を主人公にした、Flight from Nagasakiという小説を構想していたらしいが、完成に至っていない。（麻生えりか「未刊行の初期長編『長崎から逃れて』――カズオ・イシグロの描く原爆」田尻芳樹・秦邦生『カズオ・イシグロと日本―幽霊から戦争責任まで』水声社、2020、96）

7　原文は、'Prize motivation: "who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world."' Kazuo Ishiguro - Facts（nobelprize.org）　2021年３月８日アクセス。

8　カズオ・イシグロ『特急二十世紀の夜といくつかの小さなブレイクスルー：ノーベル文学賞受賞記念講演』土屋政雄訳（早川書房、2018）71－79。

9　'A Strange and Sometimes Sadness' からの引用は、筆者による日本語訳で示し、原文におけるページ数を記す。

10　*Conversations with Kazuo Ishiguro*, ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong,（University Press of Mississippi, 2008）29.

11　小崎登明『ながさきのコルベ神父』（聖母の騎士社、1988）198。

12　2021年に長崎外国語大学新長崎学センターが主催している「カズオ・イシグロ作品に関する読書会」の参加者の意見である。

13　片淵須直監督『この世界の片隅に』（『この世界の片隅に』製作委員会、2016。井上光晴『明日一九四五年八月八日・長崎』（1986）にも物語の展開が似ているが、イシグロの作品が先行している。

14　写真で見る日本の歴史・浦上天主堂、www.pict-history.com. 2021年９月16日アクセス。

15　ポール・ヴァレリー『精神の危機　他十五編』恒川邦夫訳（岩波書店、2010）42－53。

16　大浦天主堂、ウィキペディア。2021年９月16日アクセス。

17　わずかに側壁の遺構が、爆心地公園に保存されている。

18　高瀬毅『ナガサキ：消えたもう一つの「原爆ドーム」』（文藝春秋、2013）

19　「聖母像の首」川添猛『ふろしき賛歌』（聖母の騎士社、1994）117－123。北海道トラピスト修道院、野口嘉右エ門神父ががれきの中から奇跡的に発見し、保管していた。

20　コルベ神父は、1971年パウロ６世によって列福され、1982年ヨハネ・パウロ２世によって列聖された。

21　ロムアルド・ムロジンスキ修道士「小神学校の思い出」綜林No.37（1984年６月夏季号　初稿）「第二次世界大戦終了と共に、（聖母の騎士）小神学校は発展期を迎えました。1947（昭和22）年１月から聖母の騎士誌も再刊の準備に取りかかり、発刊できました。小神学生募集は戦争中も続いていましたが、戦後はサムエル・ローゼンバイゲル（Kazzimierz Sammuel Rosenbaiger）神父さまがアメリカから送ってくださる援助金のお蔭で校舎を新築し、生徒募集も人数に制限をつけずに行ないましたので、最も多い時は小神学生だけで百二十名になったこともあります」 コルベンツアル関町修学院ホームページ、https://sekimachi-fh.org/ofmconv/index.html、2021年３月４日アクセス。

22　1954年生まれのイシグロは1960年まで新中川町で暮らした。

23　神戸新聞NEXT、2018年２月14日.
http://blog.livedoor.jp/sagittariun/archives/7551641.html 2021年３月５日アクセス。
また、長崎高等女学校の追悼式の様子は、林京子の短編「空き缶」でも描かれている。そこでは、原爆で亡くなった学生たちの名前が張り出されたと書かれているが、残念ながら弔辞については触れられていない。

24　1936年には、開校したばかりの小神学校の敷地から、300年前の隠れキリシタンの十字架が発見されている。（堀憲昭、『旅する長崎学５－ キリシタン文化Ⅴ－ 教会と学校が長崎の歴史を語る』長崎文献社、2006、52頁）このようなことからもわかるように、長崎には様々な歴史の積み重ねがある。

25　Brian. W. Shaffer and Cynthia F. Wong, 211.

【参考文献】

Introduction 7: Stories by New Writers. London: Faber & Faber, 1981.

Shaffer, Brian W. and Cynthia F. Wong, ed. *Conversations with Kazuo Ishiguro.* Jackson: University Press of Mississippi, 2008.

カズオ・イシグロ『特急二十世紀の夜といくつかの小さなブレイクスルー　ノーベル文学賞受賞記念講演』土屋政雄訳、早川書房、2018。

小崎登明『ながさきのコルベ神父』聖母の騎士社、1988。

川添猛『ふろしき賛歌』聖母の騎士社、1994。

高瀬毅『ナガサキ　消えたもう一つの「原爆ドーム」』文藝春秋、2013。

田尻芳樹・秦邦生『カズオ・イシグロと日本―幽霊から戦争責任まで』水声社、2020。

林京子「空き缶」『祭りの場・ギヤマン・ビードロ』講談社、1988。

ヴァレリー、ポール『精神の危機　他十五編』恒川邦夫訳、岩波書店、2010。

平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』2018、長崎文献社。
堀憲昭『旅する長崎学５－ キリシタン文化Ⅴ－ 教会と学校が長崎の歴史を語る』長崎文献社、2006。

matsudagaigo［@］gmail.com